

1月に吾妻地区新年祝賀会があった。7人の方の挨拶を聞かせていただいた。原稿を用意して話をしたのはお一人だけだった。あとの6人の方はノー原稿である。みなさんに共通しているのは、お話がうまいという点である。

なぜなのだろうか。場慣れしているということはある。だが、それだけではない。場慣れだけの問題であれば、教員はもっと話がうまいはずである。昔から思うのだが、自分も含めて、教員は意外と話がうまくはない。

なぜなのだろうか。たぶん相手意識の問題ではなかろうか。教員が話す相手は、子どもの場合が多い。子どもは最初から話を聞いてくれる存在である。聞いてくれると、どうしたら聞いてもらえるかなどと工夫しようとは思わなくなる。

私が気になるのは、相手が大人の場合である。もう昔のことだが、結婚披露宴に行く。教員のスピーチと民間の方のスピーチを聞く機会がある。勝負にならない。圧倒的に民間の方のほうがうまい。コンパクトに必要なことを入れて、気の利いたことも織り交ぜながら話す。一方、教員はというと、だらだらとなりがちである。教員には、学校以外の場でのスピーチ力が足りない。それだけ、世の中のことをわかっていないということであろう。もちろん、中には、どこで話しても上手な教員もいる。そういった人は、気の利いたことが言える人である。

7人の挨拶を聞かせていただいて、自分はいかぬふうにはできないなど多少落ち込んだ。ノー原稿で、あんなに流暢には話せない。それも必要なことが入って気の利いたおもしろいことも程よくある。やはり、聞いてもらいたい、聞かせたいという思いが、そうさせるのだろうか。

自分が、ノー原稿の状態で話したら、事前に用意した内容にとらわれてしまい、気の利いたことを入れる余裕などないだろう。あるいは、話す内容が多少ずれてしまうかもしれない。そもそも学校以外の場となると、場慣れするほど機会が多いわけではない。

吾妻地区新年祝賀会の2日後に、ある作文コンクールの表彰式があった。ここでもお二人の挨拶を聞く機会に恵まれた。また落ち込んだ。うまい。見事である。お一人は元校長先生である。こういう方が、どこで話しても上手な教員である。

私の役目は、講評だった。原稿は準備してある。いつも以上に、ゆっくりと、間を置きながら話した。いつも以上になるべく原稿を見ずに、会場の皆さんのほうを見ながら話した。すると、いつもならば、途中からやや早口になるのだが、最後までゆっくりと話すことができた。

「あれっ」意外とうまくいった。なぜだろうか。3日間のうちに計9名の方のお話を聞き、触発されたのかもしれない。そう思ったのだが、よく考えると、聞いているのは、生徒と保護者なのである。すなわち、教員が一番得意としている相手である。他にも、会場に大人の方はいらした。だが、内容が講評なので、生徒と保護者を対象に話した。

今回の収穫は、原稿を用意したとしても、話し方を工夫すれば伝わるのかもしれないと思えたことである。ノー原稿での話が不得手であるならば、今まで以上に原稿の中身で勝負しようかと思う。そうなると、問題は卒業式である。今までノー原稿でやってきた校長式辞である。あと3週間である。やっぱり原稿を用意するか。そろそろ考えなければならない。